

第 22 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸 奈治郎（岐^{きし}至 漢方クリニック）¹

開催日 2016 年 9 月 3 日

今回は新しく提示された症例について、参加された先生方の弁証を検討する会となりました。最近は「汗」に関する勉強が続いており非常に見識を深めています。今回も汗を主訴にした症例で、4 名の先生方の弁証を検討いたしました。症例の解説は次回以降となります。

【症例】

25 歳女性

主訴) 自汗・盗汗

現病歴)

X 年 3 月 26 日 帝王切開で男児出産。出産後 3 日目の夜、風に当たって体が冷え微熱が出た。熱は下がったが自汗と盗汗が残った。「固精参茸丸」を服用したが効果は無かった。

(数日入院)

退院後 1 週間経って、産褥気の諸症状に加え、背中と腰・上腕の冷え、皮膚搔痒感、不眠が出現してきた。その後他の症状は改善したが、背中と腰の冷えはずっと続いていた。

X 年 4 月 26 日 再び体の冷えを感じ不眠が出現した。

100 日経てば治るかと思ったが症状は改善しなかったので、

X 年 5 月 漢方薬を飲んでみたが治らないので、広安門中医研究院を受診した。そこで冷えを改善する薬を 14 日分処方され、やや改善。

X 年 6 月 冷えはよくなったが自汗と搔痒感が気になるため再び上記医院受診。前回の処方に加味した薬を 14 日分処方され内服。自汗、冷えは酷くなったため路先生を尋ねて来た。

既往歴)

特になし

¹ 岐^{きし}至 漢方クリニック

〒370-0053 群馬県高崎市通町 42 八幡ビル 501 号室 <http://takasaki-kanpo.jimdo.com/>

アレルギー 海鮮

現症)

汗：自汗 胸、背中、右肩、右上腕外側末端、頭部にかきやすい。動くときと酷くなる。時には滝のように流れる。発汗後畏風。盗汗もある。

冷えやすく、時々寒気がする。

疲れて力が出ない。

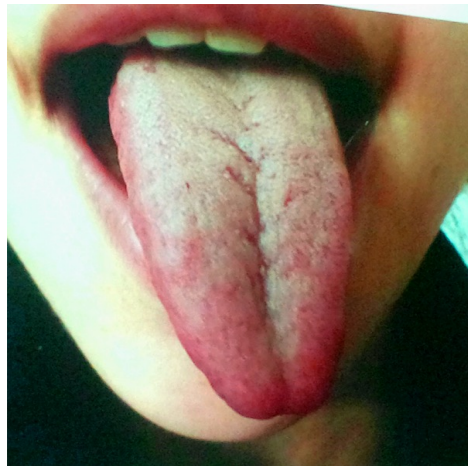
全身の掻痒感がある。赤い風疹が見られる。

口渇があり水を飲みたがるが、飲んだ後に沢山汗が出る。

煩躁、易怒、抑うつ感がある。

食欲正常。二便正常。睡眠良好。

辛い食べ物が好き。



視診：面色晄白 血色が無い。

脈診：沈細弱

舌診：舌体痩せている 舌質暗紅 黄色くて厚い膩苔 裂紋あり

〈平馬先生〉

出産後（気血消耗）←感受風寒

→衛氣受損

衛気が体表に分布できず悪寒。腠理の開合ができず脱汗。

さらに少陽枢機不利を併発したため夜間衛気が陰に入れず不眠。

三焦不利で気・津液の通行不利により鬱が生じ湿熱内生。

〔弁証〕 気血陰陽俱虚 少陽枢機不利 衛陽不振

津液内停鬱滞 湿熱内生

〔治法〕 通暢少陽 通利三焦 調和気血 清利湿熱

〔処方〕 小柴胡湯合桂枝加黄耆湯加減

柴胡 6 黄芩 6 半夏 9 人参 6

桂枝 6 白芍 6 黄耆 15 川芎 9

茵陳 6 沢瀉 9 五味子 6

大棗 6 生姜 3 炙甘草 4

〈阿部先生〉

〔病性〕 表裏挟雑

〔病位〕 心肺肝脾

〔病邪〕 虚火 湿熱

〔弁証〕 表虚不固 虚火内生 湿熱上蒸

肺気不足 肝鬱化火 営衛不和 脾気虚

〔処方〕黄耆 桂枝 白朮 白芍

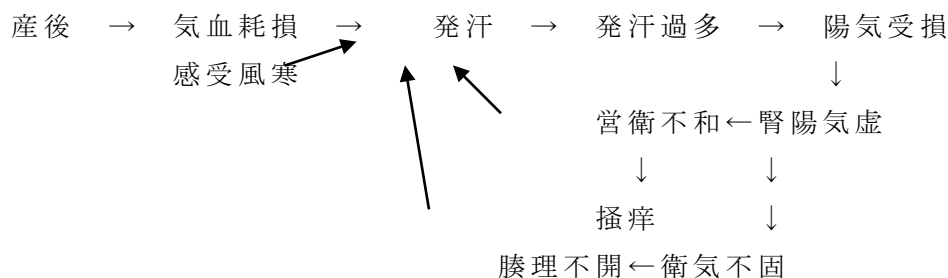
五味子 茯苓 猪苓 防風

荊芥 知母 酸棗仁

薄荷 茵陳 竜骨 牡蠣

乾姜 大棗 甘草 (当帰 竜眼肉)

〈伊賀先生〉



〔弁証〕 営衛不和 腎陽気虚

〔治法〕 調和営衛 補腎陽気

〔処方〕 桂枝湯加黄耆附子荊芥蝉退

〈岸〉

〔病性〕 裏寒熱虚実挟雑

〔病性〕 正虚邪実

〔病位〕 腎

〔病邪・不足〕

出産、発汗による気虚 → 陽虚
→ 推動不足 → 内湿

発汗 → 津液消耗 → 陰虚 → 虚熱

〔弁証〕 陰陽両虚 津液不足 水湿内停 陰虚火旺 血虚

〔治法〕 陰陽双補 滋養津液 利湿 清虚火 補血

〔処方〕 右帰飲 生脈散 温胆湯 菊花 丹参

● 温胆湯 二陳湯 (半夏 陳皮 茯苓 生姜 甘草) 加竹筴 枳実

路先生「岸先生の弁証の裏のうちの、どこに熱が、どこに寒が、虚が、実があるのかを良く考えてください。陰虚があって虚熱があると弁証していますが、そこで右帰丸、温胆湯を使うのはどうですか？それから、どこに瘀血があるのか考えてください。」

路先生「弁証で水湿内停とありますが、水ですか？湿ですか？この症例は非常に難しい症例です。こういう複雑で矛盾が生じて見える時には一つ一つをきちんと丁寧に弁証していかないとイケません。たとえばこの症例では汗を書くという表の症状があるのに脈が沈んでいるとか、冷えがあるのに汗が

出るなど矛盾しています。また虚熱があれば舌質は嫩紅で舌苔が少ないか無いことが多く、舌尖が赤みが濃いのが特徴です。この症例での舌の所見とは違いますね。こういうときにはその矛盾をどうするのか良く考えなければいけません。舎脈従症、舎症従脈という言葉があります。症状を信じるのか、脈を信じるのか、どちらを取るのか？良く考えましょう。

それから、気虚とありますがどこの気ですか？」

岸「出産をして全体的な気を損なったと思いますが、気が減って衛氣に十分充填出来ていないと思います。衛氣が不足してそれが前回の症例同様に陽虚に発展していると思うので、陽の本は腎ですから腎陽虚だと思います。」

路先生「阿部先生の虚火と湿熱はどのように理解していますか？ 湿と水についてはどうですか？ 茯苓、沢瀉、茵陳蒿の処方ですと、湿というよりも水湿、胃内停水とか浮腫みがあるとか、そういう時に使う薬のようですね。今の状態が汗を良くかわいて乾燥している状態と思いますが。」

阿部先生「水も湿も分けられないと思いますが、少ない量で良いとおもいます。」

路先生「利尿剤や芳香性の薬を使うような水であるか、湿と取るのか、細かい所ではありますが重要な所です。」

路先生「伊賀先生は桂枝湯を選んでいますが。桂枝湯で営衛不和を調和するという事は、表の病気であると見えます。裏の病態はありませんか？」

伊賀先生「まずは汗があるので表の治療をして、その後は状態に応じて治療をすれば良いと思います。」

路先生「舌は細くて舌質が赤く見えると思います。水湿があると歯痕が付いたりしますが、この人の舌を湿とするにはちょっと細くて舌も黄色い感じがします。こういう状態に桂枝とか附子を使うと心配です。」

路先生「平馬先生の処方柴胡 黄芩 半夏 人参 桂枝 芍薬 生姜 甘草 大棗は柴胡桂枝湯ですね。傷寒論では太陽と少陽の状態に使います。これに黄耆を加えて表を補って、裏の水分代謝を促進する処方ですね。」

路先生「岸先生の『裏』というのはどこですか？ そしてどこに寒熱虚実がありますか？」

岸「発疹があるので表と上半身に熱があると思います。寒は裏で特に体の陽を主る腎にあるのではないのでしょうか？」

路先生「そうすると虚熱はどこですか？」

岸「……………」

路先生「虚熱は気虚の熱ですか？ 陰虚の熱ですか？ 虚熱の時には嫩紅で苔が無い状態です。今の舌は舌尖が濃い赤い色で全体的に赤いです。舌尖は『心』ですね。なので虚熱もあるかもしれないけれど、それだけではない状

態ですね。瘀血について丹参を入れています但それはどうですか？」

岸「顔色が白く出産もしたし、陽虚も有りながら血虚もあるかと思いました。」

路先生「顔色が白いのは出血や産後のことも有りますが、今は汗です。汗がたくさん出ると傷寒論では気を消耗します。今の状態で言うとどこの気を消耗したと思いますか？」

岸「衛気が消耗されたとおもいます。」

路先生「顔色が真っ白というのは、この色の表現は陽虚を思わせる色です。晄白といいます。ぼーっとしろおくてツヤが無い状態です。陽虚だと顔色がこうなります。傷寒論で発汗した後に腎虚の人は腎陽を消耗する、その時に心気を消耗したため奔豚気のような症状があるといわれています。心気が消耗すると動悸、肺気が消耗されると呼吸苦、脾気が消耗すると食欲が無くなる、などの症状が出ます。今回はこれらの症状が見られませんから表の気が消耗している状態です。」

路先生「伊賀先生の弁証ですが、産後は汗を良くかきます。中国人は出産後外出したり窓を開けたりしないし、頭も布を巻いたりしてとても大事にします。営衛気血不足、脈絡空虚な状態なので寒さや邪が入りやすい状態だと考えています。その時に邪が入ると痺証になってしまいます。若いときには大丈夫でも、体がよわってからおこりやすいです。なので出産後は非常に体を大切にします。出産前は熱がって、出産後は虚になる。汗をかけばかくほど体が冷えて、表衛と内側の各臓の気も消耗します。

黄帝内経 素問 生氣通天論、陰陽応象大論のなかに「体若燔炭、汗出而散」とあります。汗があれば発散して熱が下がる、つまり汗によって沢山熱を出すと本来は冷えてくるはず。それなのに、この症例では3ヶ月間汗が出ているのに止まらない。汗がたくさん出て湿が溜まりますね。水では有りません。水を飲んだ湿もあります。陰も消耗してますね。ですので利湿剤は使いにくいですね。陰を消耗している時に利湿剤は使いにくいです。」

路先生「汗が出る、ということは虚熱にしる実熱にしる内側に熱があるということですよ。」

「奪血者無汗，奪汗者無血。血屬陰，是汗多乃亡陰也。故止汗之法，必用涼心斂肺之葯」といいます。津血同源なので、元々地が少ない人は汗が出ない。消耗すると汗が出ません。汗が出ると津液血の虚から陰虚になります。陰虚から熱になります。陰陽バランスが崩れると心と腎のバランスも崩れます。心火のほうが強くなり実熱になります。そうすると虚熱と実熱になります。舌が濃い赤い色になりますね。そして体の中に湿があれば汗として出てきます。熱があるから汗が出る。

ということで、表の病態もあり裏の病態もある。なので汗を止めるには涼心斂肺の薬を使います。なぜならば汗は心の液ですね。汗は必ず皮毛から出ます。皮毛は肺が司りますね。なので肺を引き締める薬が必要です。

伊賀先生の弁証で表のことも治療として必要ですが、表裏とも両方から治療するほうがいいですね。」

路先生「次回はこの症例を詳しく解説しましょう。」